

# 戦後日本の性とメディア

南 谷 覺 正

情報文化研究室

## Sex and Media in Postwar Japan

Akimasa MINAMITANI

Information and Culture

群馬大学社会情報学部研究論集

第19巻 55～74頁

2012年 3月31日

JOURNAL OF SOCIAL AND INFORMATION STUDIES

No. 19 pp. 55—74

Faculty of Social and Information Studies

Gunma University

Maebashi, Japan

March 31, 2012

## 戦後日本の性とメディア

南 谷 覺 正

情報文化研究室

## Sex and Media in Postwar Japan

Akimasa MINAMITANI

Information and Culture

### Abstract

This essay presents a compact perspective for better understanding the postwar history of Japan in terms of sex and media. History as a discipline has become increasingly broken down into separate fields of study and the interaction of sex and media—usually dismissed as a subject unworthy of mention—is isolated from political and economic history. By integrating sex and media into the so-called correct and authoritative, and therefore often quite defective, discourse on history, we can approach a more holistic view of our past, and thereby consider more appropriately the relationship of the two.

キーワード：性，メディア，日本の戦後史

### 1. はじめに

本論の目的は、通常政治・経済史に、性風俗とメディアの歴史を統合した日本の戦後史の簡略な透視図を作成し、われわれが文学作品や視覚芸術作品を鑑賞する際に、それらがどのような時代的コンテクストの中で生れたのかを知る便宜を供するとともに、歴史の中の性とメディアを、有機的に関連づけて考察することである。文学メディアも取り入れた透視図にしたかったが、紙数の制限上、それは別稿「性と文学メディア—戦後日本文学の性愛表現—」（『群馬大学社会情報学部研究論集』第19巻所収）に譲ることとした。

## 2. 戦後史における性風俗とメディア

性風俗の歴史は、われわれ庶民が読んで裨益するような、信頼するに足る情報に著しく不足していたが、近年かなりよいものが出版されている。本稿は、一々注記はしなかったが、種々の情報源を典拠とした。とりわけ、下川耿史（編）『昭和・平成家庭史年表』（河出書房新社、1997）、同（編）『性風俗史年表 1945-1980 昭和「戦後」』（河出書房新社、2007）、広岡敬一『戦後性風俗大系 わが女神たち』（朝日出版社、2000）といった労作は、中心的なレファレンスとなってくれた。それらに依拠しながら、戦後日本のたどってきた時代相を、便宜上10年ごとのスパンに区切って描き分けてみたい。

### 2.1. 1940年代（占領期）

1945年9月2日、やや狭すぎる憾みのある戦艦ミズーリ号上で降伏文書への調印がなされてから、1952年4月28日の一応の独立回復まで、日本は、専らアメリカ人によって構成されるGHQの占領下に置かれた。敗戦は国民を失意と虚脱状態に落とし入れたが、多くの人にとっては、戦争末期の灯火管制や竹槍訓練といった、一億玉砕が叫ばれる「死」に取り憑かれたような状況からの解放は、内心嬉しいことでもあっただろう。帝国主義万歳から民主主義万歳へと180°の転換に節操のなさが露呈された世相ではあった。しかし勿体ぶった「帝国主義」自体がそもそも西洋からの借り物であって、狼群に伍するにやむを得ぬ節があったとはいえ、その勇壮ではあっても一場の夢が潰えてしまえば、他に取るべき姿もなかったであろう。他方、そんなことには頓着しないで、井深大のように新しいビジネスチャンスに胸躍らせた男たちや、禁じられていた口紅やスカーフに嬉々として飛びついた女たちも多くいた。第一次大戦後のコニー・チャタレイではないが、もし生きることを選ぶのであれば、たとえ瓦礫の中ではあっても、誰しも、現在の生を肯定しなければならなかったのである。

生きる基本は、まず食べることであった。とり澄ましてなどいられなかった。地方への買い出しや闇市、軍の貯蔵物資の横流し、アメリカが（結局は有償で）与えてくれた余剰小麦粉や脱脂粉乳、（反共プロパガンダの一環として）ジープから放り投げられるチョコレートやチューインガム、時々煙草の吸殻も入っている米軍の残飯（で作られるシチュー）——飢餓状態に近かった日本人には、胃袋を満たしてくれるものなら何でもよかった。酒も、カストリ焼酎で強烈に酔えた。

生きていることのもう1つの証しは「性」であった。こちらのほうは、肉体が2つあればよかった。敗戦の涙を吸った皇居前広場は、夜は睦み合う恋人たちで足の踏み場もないほどであったというし、家を焼け出された人々も、焼け跡の暗がりに蓆を敷けば、そこがたちまち愛の巣に変じた。

日本政府は、占領軍による「性」の支配を憂慮した。そこで性の防波堤として、占領軍から「全日本女性の純潔を守るために滅私奉公の決意である」特殊慰安施設協会（RAA；Recreation and Amusement Association）が発足させられたことは周知の通りである。欧州戦線、及び日本における米軍による強姦は、「正史」に記されていないだけのことで、かなりの数に上っており、決して日本政府の取り越し苦労とは言いきれない。全国から集められ、また自主的に集まった数万人の女性たちは、

まさしく「防波堤」として、「良家」の女性たちを潜在的な強姦から守ったのである。それでも一部の良心の麻痺した米兵たちは、外地における一部の良心の麻痺した日本兵たち同様、一般市民の家屋に物品の「徴発」に押し掛け、ついでに女性を拉致して暴行することも少なくなかったと言われている。

RAAの女性たちの中には、実入りの良さに惹かれての女性たちも相当数含まれていたであろうし、栄養失調で貧相な体格の日本人男性より、『放浪記』に登場するような、缶詰をおみやげに持ってきてくれる厚い胸板のGIを好んだ者もあっただろうが、多くの女性たちは、得た給金を貧窮の家族に送り、星の流れに身を占いながら、次々と性病に感染していった。しかし自分たちが守っている同国人の女性たちからは、「パンパン」「オンリー」などと呼ばれ、冷たい蔑視しかもらえはしなかった。

GHQはRAAを容認しながらも日本人用の伝統的遊廓を禁止した。しかし、そこは阿吽の呼吸と言うべきか、遊廓側は委細承知とばかり看板を掛け替え、今度は「赤線」地帯として営業を継続し、日本人男性は、戦前・戦中と何ら変わることなく、金銭で女性を買い続けることができた。盛り場には多くのフリーの街娼の姿が見られた。

しかし日本人（男性）が戦前には知らなかった性風俗が1つ登場した。ストリップである。光のあたるステージを設けてそこに登場する女性の裸体を鑑賞するという催物は西洋起源のものであり、もの珍しさも手伝ってか大変な人気を博し、クリスマス・ケーキ同様、以後の日本の風俗にしっかりと根づいた。近代西洋でもdecencyの規範があつて、身体を動かせば卑猥だが、美術のように静止していれば芸術に準ずるという、どう見ても我田引水の理屈のもと、裸の女性が額縁の中で佇むという「額縁ショー」があり、indecencyを表立って認めるわけにはいかないGHQが、日本にそれを導入したのは蓋し当然であったかもしれない。1947年1月、新宿「帝都座」での興業がこけら落しとなった。胸を露出させ、腰部は扇で隠すというスタイルであった。またこれも西洋起源に思えるが、アングルの『泉』を思わせなくもない「行水ショー」も認可され、伝統墨守の美風のある日本では、このジャンルは20世紀後半まで維持された。『冬物語』でもあるまいが、動かない裸のヴィーナスたちは、観客の熱い視線に応えるかのように、1948年、浅草の「百万弗劇場」や「常磐座」で動き出す。むろんGHQの面々は、そんなところに出かけていく必要はなく、きれいな踊り子たちを日本政府に調達させ、全裸で踊る「エキゾチック」な日本人女性を眺めながら、勝者の美酒を味わったことであろう。

しかし散々に日本女性を見下して利用していたGHQも、新憲法制定においては、女性の地位の向上に腐心した。日本人の男の持つ（と彼らが信じていた）、病的で残忍な好戦性を、女性の力を利用して殺ごうというのだから、これも女性の利用には違いないが、そこには日本人単独では到底達成できなかったであろうものも含まれていた。それは、女性を人間として見るという見方である。新憲法草案に尽力したベアテ・シロタ・ゴードンには、日本人であろうが米国人であろうが、同じ女性を解放したいという性の共感に基づく理想があつたように感じられる。彼女の草案にあつた文言——「婚姻と家庭とは、両性が法律的にも社会的にも平等であることは当然である。このような考えに基礎をおき、親の強制ではなく、相互の合意にもとづき、かつ男性の支配ではなく両性の協力に基づくべきことをここに定める」——にも、人種を問わず、男性による性の支配に対する批判が滲み出ている。結果とし

て日本は、アメリカ本国よりも進歩的な（法的）「男女平等」を、たなぼた式に獲得したのである。

1945年10月、20歳以上の男女に選挙権を認める選挙法改正案が議会で提出され、12月に両院を通過、公布された。また、明治13年来の「有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ」という「姦通罪」も、憲法14条の「男女平等」の原則に違反することになるため、刑法改正によって廃止された。しかしこれを逆に言えば、自由恋愛によって、いわゆる「不倫」を犯しても、男女ともに刑罰的には罰せられないということになり、結果として日本人は、農地解放以上に、性的に解放されたのである。獅子文六『自由学校』（1950）は、これによってフラフラと迷走し始めた夫婦を主人公とした喜劇小説である。

これも進駐軍の誰かのさしがねだったのだろうか、1946年に『完全なる結婚』の邦訳が出版され、広く熱心に読まれた。日本人、特に日本人女性が orgasm や clitoris の存在を知ったのはこの本によるところが大きいとされる。それまでは、性行為は男のために存するのであって、女性の性的歓喜を以て性愛行為の目的となすことは一般的ではなく、男性の独りよがりで性欲を満たせば、それが自動的に女性を幸せにすると一般には信じられていた節がある。遊廓や赤線の女性は、男を喜悅させることが職業の、性技に長けた女性であって、客の方で気を遣う必要はなかった。

しかし『完全なる結婚』は世界中で読まれた本であり、それはつまり、どこでも似たりよったりの状況であったことを示唆している。ポーヴォワールが『第二の性』（1949）において、「女性」という性は男たちによって作られたものであるとし、「処女性」「母性」「永遠の女性」といった、男が好んで口にする女性らしさは神話にすぎないと喝破して有名になったのもこの時期のことである。男性による政治・経済・外交の運営の破綻の結果としての二度に互る悲惨極まる大戦——それが終わってようやく、これまでの「性」に対する考えが、幼稚で迷信的な段階のものにすぎなかったことが仄見えてきたのである。

しかし理想を言うのは簡単だが、男の性は、サカリのついた雄猫同様、そんなに簡単に馴致される代物でもない。戦後すぐの時期に発行された、いかにも占領期を髣髴とさせる『りべらる』『獵奇』といった「カストリ雑誌」は、エロ・グロを売り物にして、活字と性に飢えた男性社会の欲望に応えた。大岡昇平の『俘虜記』は、敗戦時の貴重な記録の1つであるが、俘虜収容所における日本兵の「墮落」も克明に描いてある。磯田光一は、解説「収容所としての戦中・戦後」において、大岡の意図が、占領期の日本が「日本人の俘虜体験の時期」であり、戦後日本が、「米軍の収容所の監禁状況に等しい」ことを描くことにあったと主張する。磯田も引用している、自らも春本を書いたという大岡の次の言いは、戦後世代がおいそれとは批判できない、重い言い分のように思われる。

いかに墮落した俘虜の間に交わっていたとはいえ、春本を書いた私を汚らしい奴というかも知れない。しかし私は何も春本を書かなくても汚らしい人間かも知れないのである。そういうことをいう人は、一度米軍の俘虜になって、一年コーンビーフばかりを喰わされてみるといい。<sup>(1)</sup>

ストリップにカストリ雑誌——こうした戦後性風俗は、恥ずべきことなのだろうか？ ある意味ではそうに違いない。しかし大岡の言うように、人間は本来煩惱具足であるというのも真実なら、『墮落

論』(1945)の、「人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない」という安吾の言葉も、どこか心の琴線に触れるものがある。当時のストリップ劇場の中を写した写真を見ると、ストリッパーが冗談でも言っているのだろうか、周囲の男性客たちの屈託のない笑顔が印象的だ。黒澤明監督の映画『生きる』(1952)では、志村喬演じる主人公が、ストリップを見て突然生氣を取り戻す場面がある。日本人にとって裸になることは、相撲や裸祭りに見られるように、頹廃とは言いつれない、ほとんど宗教的な意味合いすら帯びることがある。西洋文明の模倣を忌避し江戸情緒にあれほどのこだわりを見せた永井荷風でさえも、西洋由来のストリップに親炙している。そこには「やつし趣味」というだけでは説明できないものがありはすまいか。

占領期の大衆娯楽メディアと言え、やはり映画であった。木下恵介監督『大曾根家の朝』(1946)、吉村公三郎監督『安城家の舞踏会』(1947)、黒澤明監督『酔いどれ天使』(1948)、今井正監督『青山脈』(1949)などがその代表作である。『酔いどれ天使』の中で笠置シズ子が歌う「ジャングルブギ」は、黒澤自身の作詞で、最初「腰のぬけるほどの恋をした」という歌詞が含まれていたが、笠置が「こんなえげつないの、わて歌われへん」と応じなかったため、「骨の溶けるような恋をした」に改められたというエピソードがある。<sup>(2)</sup> 当然ながらこのように、ほとんどの日本家庭の日常においては、都会のカストリ文化、ストリップ文化は意識の隅に追いやられ、戦前と同じ貞節の建前が強固にあって、性的に露骨な表現に対しては、強い拒絶反応が示されていたのであろう。

戦時中には御法度であったアメリカ映画は、戦後、再び日本の映画館に戻ってきた。『カサブランカ』(1942年制作；1946年6月13日日本公開)は、反ナチのプロパガンダ映画で、占領軍の対日政策にもよく合致していたのであろうが、日本人の観客にはそんなことより、イングリッド・バーグマンの美貌とハンフリー・ボガードの男性的渋みが、強烈なアピールを持ったに違いなく、それはハリウッドの販売戦略に基づくものであったにせよ、西洋風な性的魅力を、肉体的に、ファッション的に取り込もうとする、日本人の長い涙ぐましい本格的努力が、ここに緒に就いたのである。

## 2.2. 1950年代

もし日本が1945年3月から7月の時点で、米軍の大規模戦略爆撃の残虐さを理由に、たとえ理不尽な無条件降伏要求に対してであっても、忍びがたきを忍んで降伏していれば、原爆投下も朝鮮戦争もなかったかもしれない。しかし国民がいくら殺されようが意に介さず、面子失墜と降伏後の連合軍による報復措置を怖れる軍中樞や政府要人は、無意味な抵抗を継続し、戦争のさらなる惨禍を日本国民だけでなく、他国民にも及ぼす結果となった。無謀な開戦と同じほどに無責任なこの降伏の遷延により、ソ連の参戦を許すに至り、1950年6月から始まる朝鮮戦争を準備することになる。朝鮮民族は、日帝支配からの解放の喜びもつかの間、民族分断という悲しむべき歴史を今日までひきずっている。皮肉にも日本はその戦争によって、軍需物資、被服、輸送機械、さらには労務関係雇用に対する莫大な「朝鮮特需」を得て好景気となり、戦後復興にはずみをつける。今日の「日米同盟」(そして実質的に不動となった「55年体制」)の基礎は、この時期に固まったと言ってもよい。一般の日本人には意識

されなかったが、横田、岩国、佐世保、沖縄等の各基地から米軍は出撃していき、再び「正義の戦争」に駆り出されて血腥い懈怠を漂わせていた米兵たちと、基地で働く日本人ジャズマンや歌手たち（ハナ肇、江利チエミなど）の間には、真剣な音楽的交流があったに違いない。1951年からの日本のジャズブーム（1953年には熱狂的なものとなる）にはそうした機微も働いているのであろう。

1953年、水俣一帯で中枢神経異常患者とネコの狂死が多発したことは、すでに日本の環境が、やみくもな「復興」を遂げる産業によって悲鳴を上げ始めているという徴であった。しかし国は戦時中と同じく国民の犠牲には目をつむり、のらりくらりと引き延ばしを図るばかりで、企業側に責任があることを正式に認めたのは、時すでに遅き1970年代に入ってからのことであった。

1950年代は、1958年に映画観客数が延べ12億人に達したことによく表れているように、映画の黄金時代であった。黒澤明監督『羅生門』（1950）、小津安二郎監督『麦秋』（1951）、溝口健二監督『西鶴一代女』（1952）、小津安二郎監督『東京物語』（1953）、今井正監督『君の名は』（1954）、成瀬巳喜男監督『浮雲』（1955）、溝口健二監督『赤線地帯』（1956）、堀川弘通監督『女殺し油地獄』（1957）、木下恵介監督『櫛山節考』（1958）、小林正樹監督『人間の条件』（1959）などずらりと力作が並ぶ。「暗い」現実を映し出そうとするものが目立つ。『君の名は』における、佐田啓二と岸恵子の「ガラス越しの接吻」が話題になるほどであるから、性愛表現はきわめて制限されたものであったが、西鶴や近松、さらには当世の「性風俗」を取り上げるなど、性的なものに少しずつ接近していく気配も感じられる。

1950年代の日本で、手塚治虫『鉄腕アトム』、横山光輝『鉄人28号』などのロボットを主人公とする漫画が人気を持ったのは、科学技術の発達に日本の未来を託す、共有された危険な夢を背景にしていたが、ロボットが asexual な存在で、性的な不安を免れているという安心感も大きな要素であった。

現実の性風俗では、1953年に性的サービスを行う「トルコ風呂」が始まったこと、1956年に「売春防止法」が制定され、約2年の猶予期間を置いて、1958年4月1日から施行されることが大きな出来事であった。ちなみに、売防法以前の浅草・吉原は、次のようであったらしい。

昭和三十三年、吉原の灯が消えて、大きな影響を受けたのが浅草だ。観音様と三社様と六区の興行街が目玉の盛り場だが、その売り以上に吉原の存在がこの街を賑やかにしていた。最盛期の吉原は、特殊飲食店が二百九十軒、店を張る女給が二千三百人、それを目当てに訪れる客が一日八千人以上。見物だけの“冷やかし”を含めれば、一万人の男たちが出入りした。その八〇％が浅草を経由する。まずはここをぶらぶら散歩して、軽く一杯。ストリップで気分を盛り上げ、それから吉原に繰り込む。“張り店”の娘を冷やかしながら相手を決める——これが“赤線遊び”の常道だった。<sup>(3)</sup>

売防法の結果、江戸時代から存在していた公娼制度は表向き廃止となり、売春は刑事罰対象となって今日に至っている。不倫や promiscuity は罰せられないが売春は罰せられるという、やゝ分りにくいことになったわけである。しかし「性」は、ここでも法律の網をかいくぐって生きるしたたかさを見せる。旧赤線はその多くが、「トルコ風呂」「ピンク喫茶」「マッサージ業」等の風俗営業への転身を図り、それ以外は多くが闇の売春組織に流れた。

ストリップの方は健在で、「浅草ロック座」「浅草フランス座」「浅草ロマンス座」「百万弗劇場」「常

磐座」などを中心にストリップ・ショーが華やかに繰り広げられた。このように浅草は、映画館、演芸場、ストリップ劇場が薨を競う繁華街として、東京オリンピック（1964）までは東京の中心的な歓楽街であった。ストリップの演出はかなり性的要素を濃くしたものになっていたようで、伝説のストリッパー、ジブシー・ローズは、その「グラインド」や「バンブ」といった激しい腰の振り方で観客に固唾を飲ませた（あまりに性的刺激が強いので、のちに腰を振る頻度を制限されたという）。彼女の容姿も西洋人かと思えるほどで、写真に見るその蠱惑的な眼差しは、西洋風の vamp と呼ぶにふさわしい光を帯びている。西洋のミメシスは、まず女性という性の中で受胎が行われたかのようだ。1951年には美人コンテストが盛んに行われ、当時の写真の「ミス」たちを見ると、彼女たちの美しさのターゲットが、はっきりと西洋風の性的魅力を含んだものに移行し、しかもすでにかなり板についたものになっていることに一驚を喫せざるを得ない。

ストリップ劇場の幕間コントを演じる芸人から、後の俳優やタレントが輩出してきたこともよく知られている。伴淳三郎、渥美清、コント55号（萩本欽一・坂上二郎）、ビートたけしなどの芸人たちがその代表格である。井上ひさしも浅草の座付き作者としての経歴がある。彼らはストリッパーたちと身近に接しており、それが彼らの芸風に浅草独特の味を添えている。

明治の娘義太夫同様、今日の感覚からは当時の熱狂の理由が理解しにくい女剣劇は、大正末期から昭和初期にかけてすでに人気のある興業ジャンルであったが、戦後の浅草で浅香光代が太刀回りの時に、太股をチラリと見せるのが評判を呼んだ。ストリップの手法を取り入れたものと思われる。「チラリズム」（1951年初出）という言葉は現在でも使用されている。

1953年のテレビ放送開始は、何と言っても日本メディア史上の一大画期であった。（早くも1956年には、大宅壮一のTVによる「一億総白痴化」発言が出ている。）しかしテレビ受像機は非常に高価であったため一般家庭には簡単に入り込まず、「街頭テレビ」はいつも人だかりがしていた。しかし1959年の皇太子成婚パレードを機に売上げを急増させたテレビは、大衆向け視覚メディアとして、以後着実に映画の領分を侵していくことになる。（「月光仮面」が始まったのと同じ1958年に制作されたTVドラマ「私は貝になりたい」は、「一億総白痴化」とは言い切れないテレビの潜在力を示した。）

日本の文化的「宗主国」であったアメリカの1950年代は、『プレイボーイ』誌の創刊、エルビス・プレスリー、マリリン・モンロー等のセックス・アピールを売り物にする歌手や俳優の登場に示されているように、性的魅力が商品になることを知っている資本主義が、性を、ヴィクトリアニズムやピューリタニズムの残滓を押しつけて文化の表舞台に出そうとする動きが目立ってきた時代であった。（いわゆる「モンロー・ウォーク」の登場が1953年、プレスリーの *Hound Dog* が1956年であった。）売れることが存在価値である資本主義文化にとって、プレスリーやモンローの存在は福音であった。メディアも、ドル箱となるアイドルを巧みにプロデュースし始め、こうしてメディアをうまく味方につけた「性」の市民権獲得は時間の問題となる。大衆はメディアの戦略にうまく乗せられてアイドルを熱狂的に支持し、1960年代の「性革命」への道を敷いたのである。

1954年1月14日、マリリン・モンローが、大リーガーのスーパースター、ジョー・ディマジオとの



新婚旅行を兼ねて来日したときの日本のマスコミの興奮ぶりは語り草になっている。セックス・シンボル崇拜の機運が、日本においても熟していた証拠であろう。

### 2.3. 1960年代

1960年代は、世界史的に見ても大きな構造的変動が見られた10年であった。レヴィ=ストロースの『野生の思考』、トマス・クーンの『科学革命の構造』、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』——いずれも1962年の出版物——と並べてみると、起動しつつあるパラダイム・シフトが鮮やかに見て取れる。それは、人類の直面していた最大の危機と関係があるのかもしれない。米ソの冷戦構造は、スターリンが死去しフルシチョフが首相となった1950年代後半になると「雪解け」などとも言われ、融和の機運も生まれてはいたが、核競争の熾烈さは変わらず、1961年にはソ連はツァーリ・ボンバーという史上最大の水爆実験を実施し、その翌年の1962年には世界中で140発以上の核兵器実験が行われた。1962年10月のキューバ危機は一触即発状況を招き、人類は文字通り絶滅の危機に瀕した。原爆を広島・長崎に無警告で投下しそれを正当化したアメリカは、他国がアメリカに核兵器を撃ち込むことを倫理的に排撃できず、ソ連が核兵器の開発でアメリカに追いつき、長距離ミサイル、宇宙開発の面で一步先んじると気が気ではなくなり、核実験、核開発競争は、軍産複合体の利益にも適うことであってみれば、正気の沙汰を超えたものになってゆき、気がついてみればいつの間にか人類は、人類自身を破滅させるに十分すぎるほどの、しかもボタン操作だけで肅々と殺戮と破壊が行われる兵器システムを保有するに至ったのである。ユダヤ教、キリスト教が共有する終末思想は、現実味を帯びたものになっていた。とまれ、ある日突然この世が終わり、自分が意味もなく死滅するという感覚は、既成の価値観を、信じるのが馬鹿馬鹿しいものに変じさせ、40年代、50年代から現れてきた前衛的な不条理文学の感覚は、庶民レベルにも浸透してきた。

アメリカの1960年代は、公民権運動とカウンター・カルチャーに揺れた10年として記憶されているが、同時に「性革命」の時代でもあった。1959年に滞米中であった亀井俊介は、当時のアメリカでは『チャタレイ夫人の恋人』も無削除版では読めず、また『プレイボーイ』誌などの写真のヌードにしても、「ハリウッド映画の美女たちと同様、性的には無垢なふりを押しとお」す、つつましいものすぎなかったと回想する。しかし次に1969年に渡米した亀井は、アメリカの10年を隔てての変貌ぶりに驚くことになる。

ところが一九六九年、ふたたびアメリカへ行ったとき、私はびっくり仰天させられる羽目になった。かつて「密輸」してやった本が日本ではいぜんとして完訳は発禁なのに、堂々と本屋で売られているのだ。いやどんなポルノグラフィ作品も、文字で書いたものは、もはや完全な自由を獲得しているように見えた。グラフィックなものも、性器をこれ見よがしに露出していた。その後二、三年すると、性行為そのものも、書物や映画のなかで氾濫するようになった。いつしか、「エロス」という言葉さえさびれ、「セックス」にとって代わられた。

アメリカ人の生き方や風俗も急速に変わっていった。若者たちの「カウンター・カルチャー」の運動の中心的なところにも、性の解放があった。女性解放運動や少数派人種の運動も、従来の性道徳に果敢に挑戦し

た。「性革命」は、文学、演劇、音楽、美術、その他あらゆる分野にひろがり、「文化革命」の様相すら呈した。そういう動きを軽蔑していた階層も、やがてそれに巻き込まれていった。離婚とか（結婚でない）同棲とかが一種の流行となり、ゲイ・パワーなるものも生まれ、伝統的な意味での家庭の崩壊が論議されるようになった。<sup>(4)</sup>

1960年代を通じて、結婚前に性交渉を持つことは、もはや禁忌ではなく、むしろよくあることとして受け止められるようになっていった。1950年代にマリリン・モンローがセックス・シンボルとして異常な光彩を放ち得たのも、まだ性的抑圧が強く働いていたからこそかもしれない。1962年のモンローの自殺は、スクリーンの上の虚像としての彼女と、実人生の彼女との乖離を日本人にも鮮烈に印象づけた。アンディ・ウォーホルのシルク・スクリーンによるマリリンのイメージの大量生産には、そのことについての痛烈な皮肉が、死の匂いとともにも籠められている。また同年に出版されたダニエル・ブアスティンの『幻影の時代』は、映像革命の意義をいち早く察知した著作になっている。ヴァーチャルなものが実物以上に影響力を行使し得るのだ。それは金銭がモノ以上にパワーを持つようになったこととよく似ている。セックスをイメージの中に取り込めば大衆は間違いなく食いついてくる、性は商品になるという認識は確信へと深まり、性的な刺激は、1960年代を通じてより強いものへと駆り立てられるようになる。そしてそれを可能にするために、社会が性に対してますます解放的になることが求められた。マリファナ、LSD等のドラッグも、現実逃避の手段であると同時に、性の快感を高める手段としても広まっていった。オーガズムの神が、夜の俗人生における至高神となったのである。

60年代の後半になると、冷戦の代理戦争としてのベトナム戦争はしだいに酸鼻きわまる戦争へと泥沼化していき、メディアによって、戦争の実態の一部が視覚映像としてテレビ画面にも映されるようになる。若者たちの多くは、“love and peace”をスローガンとして掲げ、反戦、ドラッグ、フリーセックスによって旧体制に全面的に反抗するヒッピー文化、カウンター・カルチャーに共鳴し、それが黒人解放運動、女性解放運動と手を携えて、アメリカ建国以来の伝統である、理想的なコミュニケーションを求める運動へと高まっていった。1963年のワシントン大行進、キング牧師の“I Have a Dream”演説、1969年のウッドストック・フェスティバルはその象徴的イベントであった。

性愛行為をリアルに映し出すポルノ映画の公の解禁に先鞭をつけたのは北欧であった。1969年にはデンマークが、ハードコア・ポルノを合法化し、これにオランダが続く。しかしアメリカにおいても、性愛表現に対する新たな基準は、1966年の『ファニー・ヒル』判決によって示され、以来、文学における性表現が大幅な自由を得たのは前掲の亀井の証言にある通りである。

日本の1960年代は、「60年安保」で幕を開けた。安保闘争は、1965年以降のベトナム戦争への反対運動へ、そして1960年代末の「大学紛争」へと引き継がれ、政治的に反体制的なバイアスの強くかかった10年となった。反戦、反安保、反資本主義、大学管理体制に対する反対を、「シュプレヒコール」、「吊し上げ」、バリケード封鎖、角棒、火焰瓶等で訴えた大学紛争は、アメリカ以上に燃え上がり、1969年の「安田講堂攻防戦」でその頂点を迎え、東大は入試を中止するという異例の事態となった。

しかし日本の1960年代は、経済的には、驚異的な成長を成し遂げた10年でもあった。1964年の東海道新幹線の開通、東京オリンピックは、戦後日本の「高度成長」の象徴としてわれわれの記憶に鮮明に刻まれている。1965年から始まる「ベトナム特需」に後押しされた「いざなぎ景気」（1967年のボーナス支給は史上最高となり、「昭和元禄」という呼称がこの頃から始まった）によって、1968年にはGNPが西ドイツを抜いて世界第2位となる。こうした経済的好況に支えられた佐藤政権は、1964年から1972年まで、足掛け8年の長期政権となった。

1960年代前半には、「三種の神器」と呼ばれたテレビ、冷蔵庫、洗濯機などの電化製品が、所得の増え続ける家庭に急速に普及していった。テレビは、1964年には90%の世帯に保有され、ラジオを駆逐して家庭の中心に座を占めるとともに、映画に取って代わって、娯楽メディアの玉座にも就いた。冷蔵庫、洗濯機、それに掃除機は、主婦の日々の家事の負担を軽減し、インスタントのラーメン、コーヒー、味噌汁など、食事をつくる手間の簡素化も始まり、主婦にプライベートな自由時間を与えることに貢献した。昼下りの閑雅な主婦層をターゲットにしたテレビ番組「昼メロ」——最初の「昼メロ」は、1960年のフジテレビ「<sup>にちにち</sup>日」の背信；アメリカでは、1950年代初めには soap opera は定着していた——が登場し、主婦の夢を助長した。青島幸男作詞、クレージーキャッツの植木等が歌う「スーダラ節」がヒットしたのが1961年、「無責任男」の笑いは、工業社会の美徳である生真面目さから少し距離を置き始めた日本人を、半ば自嘲気味に映し出しているようだった。

漫画の領域では、『少年サンデー』『少年マガジン』『ぼくら』『冒険王』『少女フレンド』『マーガレット』などの漫画誌が創刊され、水木しげる、白土三平、藤子不二雄、石ノ森章太郎、ちばてつや、赤塚不二夫、川崎のぼるといった売れっ子漫画家たちが、「スポコンもの」「武芸もの」「ファンタジー」「ミステリー」「ギャグ漫画」など、漫画の様々な領域を開拓していった。少年・少女が読者であるため、大人の現実世界とは違って、性愛表現はまだほとんど見られなかった。

日本の1960年代の風俗にも「性革命」は顕著に見られ、ある意味ではアメリカ以上の開放性を帯びるようになったとも言える。1964年の東京オリンピックに向けて性風俗の取締りが一段と強化されたにもかかわらず、性はしだいに露わなものになっていった。ストリップにおいては、大正期のカフェーがそうであったのと同様に、「えげつない」風が関西から吹き始めた。1960年の関西のストリップ劇場では、性器まで見せる出し物が行われるようになっていた。映画でも、性描写を中心にした「ピンク映画」が1960年代半ばあたりから組織的に制作、上映されるようになり、東映などのメジャーな映画会社も「18禁」映画に手を出すようになっていった。1964年の武智鉄二監督『白日夢』は、きわどい性描写を含み、警視庁は「猥褻映画」としてカットを要求した。

トルコ風呂では、ある種の性的サービスはすでに行われていたが、この頃から「本番」も例外ではなくなっていく。女給による接客サービスが売り物の、かつてのカフェーに似た「キャバレー」も、盛り場に数多く見られるようになり、夜の繁華街は色とりどりネオンの光を煌めかせて、ベトナム特需に潤う社用族を呼び寄せた。

大衆向けの週刊誌は1950年代後半には市場に出回っていたが、1960年代に創刊された『平凡パンチ』、

『週刊プレイボーイ』（ともに1964年創刊）などの男性向け週刊誌は、ファッションやセックスに関する記事と呼び物にして売り上げを伸ばした。

テレビでも、女性のヌードがオン・エアされるようになり始めたのがこの時期であった。フジテレビの「ピンク・ムード・ショー」が先駆けとなり、人気深夜番組「11PM」でもストリップ・ショーが放映され、PTAの猛烈な反対を尻目に高視聴率を獲得した。

1960年代のポピュラー音楽界には、ロックグループ「ビートルズ」旋風が吹き荒れた（デビュー曲 *Love Me Do* の発表が1962年）。日本でも、それ自体がセクシーなエレキ・ギターの大音響を響かせる「グループ・サウンズ」が1960年代後半から若者の人気をさらい、長髪とジーンズ・ファッションが若い男性に浸透した。女性ファッションでは、1965年にロンドンで初登場するやたちまち世界に伝播したミニスカートが1960年代後半（1967年のイギリス人モデル、ツイッギーの来日以来）から流行し、スカートの縁が少なくとも膝上10cmくらいまで上がり路上を眩しくした。ダンスも1960年代前半の「ツイスト」からよりセクシーな「ゴーゴー・ダンス」へと移行した。（1967年、演歌の女王美空ひばりが、時代に取り残されるのではないかという危機感から、ブルーコメッツのエレキ・サウンドに乗せ、ミニスカートで踊りながら「真っ赤な太陽」を歌ったことは多くの人を驚かせた。）

未婚男女の性意識も解放され、今日言うところの「ラブホテル」である「温泉マーク」旅館があちこちに建てられ、恋人たちに逢瀬の場を提供したばかりでなく、街娼たちによっても頻繁に利用された。返還前の沖縄では1万人に近い娼婦が、ベトナムに出撃する米兵たちの性の相手を務めていた。

## 2.4. 1970年代

大学紛争の闘争目標の1つであった安保条約があっけなく自動継続され、国民も学生も、「われわれは〜」という学生運動家のアジ演説やイデオロギー論争に倦むようになり、「シラけた」雰囲気立ち籠める中、1970年代が始まった。学生運動自体、局地化した「成田闘争」を除けば、陰惨な「内ゲバ」闘争に墮していく。（1972年の浅間山荘事件は、イデオロギーに狂った人間たちの所業としてテレビ中継された。）人々は、左翼的イデオロギーよりも、次第に豊かになっていく生活を歓迎した。折しも田中角栄の『日本列島改造論』が発表され、新規開発をあてこんだ土地投機により、地価が急騰した。新世代の若者たちは、「三無主義」（無気力・無感動・無関心）と揶揄されながらも、「内向の世代」と呼ばれる文学者たちのように、日常性に回帰し、フォークソング「神田川」（1973）や、渥美清主演の映画『男はつらいよ』といった、「優しい」文化に引き寄せられていった。1970年11月25日の三島由紀夫の自衛隊市ヶ谷駐屯地での割腹自殺には、そんな生ぬるい生に対する狂的な拒絶が強烈に籠められており衝撃を与えた。しかしそれも、大阪万博に象徴される高度成長経済の下での消費生活、消費文化の滔々たる流れの中にいつしか埋没していった。東京では、浅草に代わって、闇市の街だった新宿や渋谷、元進駐軍の街六本木が賑わうようになる。新宿のゴールデン街は文化人たちの溜り場となり、渋谷のジャンジャンで流行りの演劇が上演され、六本木では芸能人が浮き名を流した。

1975年になってようやくベトナム戦争の泥沼から脱却できたアメリカは、敗戦と破廉恥なウォー

ターゲット事件によって、経済的にも精神的にも大きなダメージを負うことになった。キャロル・キングの *You've Got a Friend* (1971)、ジョン・デンヴァーの *Take Me Home, Country Roads* (1971)、カーペンターズの *Only Yesterday* (1975) のような「癒し」の音楽が、その傷に優しくしみ込んだ。

優しさの文化は性にも寛容な文化となり得る。アメリカでは、1972年の *Deep Throat* や *Behind the Green Door* を皮切りに、ハードコア・ポルノが大手映画館で上映されるようになり、以後アメリカは、ポルノ映画の分野でも世界の覇権を握ることになる。やはりカリフォルニアがそのメッカとなった。

日本でも、映画への性の浸透が目立った。それまで吉永小百合主演の純愛映画などを製作していた日活は、テレビの台頭による映画の斜陽化に抗しきれず、1971年から、低予算でも制作できる「ロマンポルノ」路線に大きく転向した。(日活ロマンポルノは1988年まで制作された。) こうしてそれまでは裏街道的存在であったピンク映画は、大手映画会社の路線変更によって社会的市民権を得た格好となり、路上には扇情的なポスターが貼られ、大学祭でも日活ロマンポルノが上映されたりした。しかしハードコア・ポルノは、日本ではまだ禁止されていた。

アイドルには時代が反映する。キャンディーズ (70年代前半) やピンク・レディ (70年代後半) の魅力は、50年代の原節子や60年代の吉永小百合といったスターにはない、可愛いセクシーさを感じられる。(1972年の山本リンダの「どうにもとまらない」は、ヘソ出しルックにより、かなり露骨に性的要素を出したが、その人気は長くは続かなかった。) 女性の水着は、これ以上肌の露出は無理と思われる「ビキニ」が増えていき、こちらの方の人気は男女とも、衰えることなく今日に至っている。

日本に遅れをとった感のあるアメリカのストリップは、それでも1969年には (やはりこの方面では革新的なカリフォルニアで)、最後の布切れが取り払われたが、1970年代の日本はさらにその先を行っていた。男女の出演者が舞台上で性行為を行う「シロクロショー」、お客とストリッパーが性行為を行う「mana板ショー」が始まり、その猥雑さは極点に達した。

橋本与志夫は、しだいにさびれていく浅草ストリップについて次のように述べている。

…ストリップのメッカといわれた浅草も [ストリップ劇場は] 三館を数えるにみになってしまった。かつて都内だけで十四館が、それも堂々と目抜き通りに面して裸を競い合っていたことを考えると、まるで夢のようであった。かわって目に飛び込んでくるのは、船橋や川口、川崎といった近郊の劇場でおこなわれるレズビアンショー、天狗ショー、mana板ショーなどの説明する気にもなれないどぎついポスターである。

ただ芸もなしに、出てきて、脱いで、見せるだけ、といった様相を呈していたストリップが当然行き着くべき姿なのかもしれないが、そこにはかつて見られたお色気やユーモア、踊り子魂といったものはかけらもない。

時代の移り変わりとともにショーの形態も内容も大きく流れ動いてゆくのは当然だが、一九四七年初頭、敗戦の申し子として生まれたストリップ時代は完全に幕を降ろし、二度と戻ることはないといっているだろう。<sup>(5)</sup>

しかし1970年代の、何もかもを見せる、場末の伝説的ストリッパー、一条さゆりの舞台について、広岡はその鮮烈なエロティシズムを高く評価している。駒田信二『一条さゆりの性』(講談社、1983) に基づいて制作された日活ロマンポルノ、神代辰巳監督『濡れた欲情』は、実際の吉野ミュージック

劇場のあった野田駅近辺の景観を背景として繰り広げられるストリッパーたちの生活を飄味豊かに描き出しており、時代を知る記録としても貴重なものとなっている。

1971年、「花影」がオープンして以降、それまで「滋賀のチベット」と呼ばれていた雄琴は、あれよあれよと言う間に関西のトルコ風呂のメッカとなっていった。「トルコ嬢」は艶を競い、性技を洗練させ、1日に何千人もの客を、京阪、北陸から呼び寄せた。

1970年代、テレビは急速にカラー化し、白黒テレビを駆逐する。1972年にNHK総合は全番組をカラー化し、1976年には受像機のほぼ90%がカラーテレビになっている。もう1つ特筆すべきメディア史上の革新は、家庭用ビデオの開発・発売である。ソニーのβ方式（1975）とビクターのVHS方式（1976）が並走し、10年間に及ぶ「ビデオ戦争」が継続することになる。最終的にVHS方式が勝利を収めるのだが、その勝因の1つが、その頃から出回り始めた「裏ビデオ」と呼ばれるポルノビデオが、しばしばVHSビデオデッキの景品につけられて販売されたためだという噂がある。その噂の真偽は別としても、家庭用ビデオは、映像情報を個人が保存・所有することを可能にした画期的なメディアであると同時に、性愛映像が家庭に忍び込むためのうってつけのメディアともなった。

それと同時期に、マイクロソフト社とアップル・コンピュータ社が設立され、1977年には、アップル・コンピュータから初のパーソナル・コンピュータが発売された。日本ではパソコンの普及にはしばらく時間を要するが、文書作成の機能に特化したコンピュータであるワープロがまもなく発売され、発売当初は庶民には高嶺の花であったが、しだいに手頃な値段になっていき、80年代になると一般に普及していく。このことは文書の編集や保存が格段に容易になったこと以上に、日本語の複雑な表記体系（漢字、ひらかな、カタカナ）がデジタル化されることによって、アルファベットに遜色のない伝播能力を帯びるようになったというきわめて大きな意義を有している。

1979年の「ウォークマン」の発売もメディア領域の特筆事項であろう。それまでもポケットラジオを携行して、耳にイヤホンをつっ込み、路上でラジオを聞くということは行われていたが、自分の好きな音楽（語学、朗読、落語等）を好きなときに聞くことはできなかった。「ウォークマン」は、アラカルト式情報メディアを身体の一部のように携行するところ、後のケータイのハシリと見ることができよう。1978年のTVゲーム「スペースインベーダー」の大流行も、後のファミコンの前兆であった。

1960年代までは、漫画、アニメという視覚メディアは、少年少女向けのもと考えられていたが、1970年代には、『あしたのジョー』（1968-1973）や『はだしのゲン』（1973-1985）など、大学生にもよく読まれるようなシリアスな作品が出てきた。またTVアニメ『宇宙戦艦ヤマト』（1974；劇場版1977）は、ファンクラブが多数できるほどの人気となり、これをきっかけに「オタク」と呼ばれる若者たちが簇生してきたと言われている。『宇宙戦艦ヤマト』は、後の『機動戦士ガンダム』『新世紀エヴァンゲリオン』の源流となった。

即席麺は1958年の日清チキンラーメンが嚆矢であったが、1971年に同じ日清食品から発売された「カップヌードル」は、お湯さえあれば3分でできる手軽さが受けて大ヒットとなり、ファーストフードの流行に先鞭をつけた。日本マクドナルドが銀座に1号店を開いたのもやはり1971年であっ

た。牛井の吉野家がフランチャイズ店を開いたのが1973年、1970年代の日本文化は、良きにつけ悪きにつけ、スピードと軽さを身に付けてきたと言えよう。

1976年にはカラオケシステムが開発され、以後、酒場やスナックで客が歌を歌うことが定番になっていくが、これも文化的には大きなシフトで、それまで情報文化の受信役の席に座らされてきた庶民が、自分も情報文化の表現者になることができるようになったのである。(スポーツではプロ・スポーツを観戦し、アマ・スポーツで実践することが以前から行われていたが、庶民がフル・オーケストラの演奏をバックに歌うことは、カラオケによって初めて可能になった。文化活動におけるプロ・アマの境界がぼやけていくことが1970年代以降の1つの特色となる。文化的情報発信が誰でもできるような環境整備が、情報化社会の1つの大きな潮流だからである。)

1960年代は、近代のブルジョワ産業社会体制に激しい挑戦がしかけられた動乱の時代であったが、1970年代は、その嵐が凪いでいく中、次の新しいメディアや思考様式による「静かな革命」が少しずつ進行していった10年であったというふうに位置づけることができよう。

## 2.5. 1980年代

1980年代に入ると、アメリカのレーガン、イギリスのサッチャー、ドイツのコール、日本の中曽根康弘が、「新保守主義」の強力なスクラムを組んで、共産圏をじりじりと圧迫していった。共産主義諸国の覇権を握っていたソ連では、目玉であった「計画経済」がうまく機能せず、食料品すら不足がちで、沸騰点にまで高まりかねない民衆の不満を、密告体制と恐怖政治によって何とか統制しているといった状態が長く続いていた。1979年から80年代末まで10年に及んだアフガニスタン戦争によってソ連経済はさらに疲弊し、後の冷戦敗北、連邦瓦解を早めることになる。もう1つの共産主義大国である中国は、1970年代末に始まる鄧小平の「改革開放路線」によって実質的に自由経済体制へ転身し、1990年代末まで年平均10%という驚異的な経済成長を続け、2000年代に入るとソ連に代わって、経済的に重要なプレーヤーとして、世界の舞台にいきなり(といった印象で)姿を現すことになる。

1970年代以降の日本経済は、二度に亙るオイルショックによる一時的低迷を挟みつつも、ゆるやかな右肩上がりの安定成長期に移行しており、1984年には男女とも平均寿命が世界一となり、日本人は、それを豊かさの証として自信を持ち始め、西洋諸国を見下すようにすらなった。そのように調子づいた日本は、1987年からいわゆる「バブル期」を迎えることになる。1983年に1万円であった日経平均株価は1989年には3万8千円を超え、どの株を買っても面白いように株価は上がり、利ザヤが簡単に稼げた。主婦までもが「財テク」に手を出すようになった。まとまった金は、下がることはない信じられていた土地に投機され、東京の住宅地の地価は1986年から1991年にかけて2.5倍に跳ね上がった。1989年の三菱地所によるマンハッタンのロックフェラーセンターの買収(2,200億円)は、バブル期のジャパン・マネーの象徴であった。1970年代から伸び始めた海外旅行もこの時期に急伸し、1986年に550万人であった日本人海外渡航者は、1990年には1,000万人の大台を超えた。

しかしこうした豊かさの陰で、病的な現象が進行していた。だぶついた金は、一時的に金策に困っ

た人や、何かを買いたくてたまらない人に高利で貸し付けることによって、放っておいても金が金を生む、濡れ手に粟式の金融業が雨後の茸のように繁殖した。70年代後半から80年代にかけ、消費者金融（サラ金）業者が都市のあちこちに店舗を構えるようになり、その看板が、英会話学校、ファーストフード店、家電量販店等の看板に混じって原色のけばけばしさを競い合い、電線の蜘蛛の巣を透かして見る日本の都市の景観は、がっかりするほど俗悪なものになった。多くの地方都市も、田舎ですらも、ちやちや都市的ハコ物が好き勝手な向きに建てられた、うすら寒い景観を呈するようになっていった。水と大気汚染も深刻化・広域化し、オゾン層の破壊までが懸念されるに至った。

メディア領域では、1989年にNHKのBS（衛星）放送が始まり、外国のニュース番組が直接放送されるようになり、庶民にもグローバル化が実感された。1970年代に発売が始まったワードプロセッサは急速に普及し、企業はもとより、個人の保有も普通のことになり、出版社も手書き原稿を厭うようになる。デジタル化は時の勢いで、1982年に音楽CDとCDプレーヤーが発売されると、その後数年間で、それまでのアナログ音響機器とLPレコードは店頭から静かに消えていった。子供の世界にデジタル機器が入り込んできたのもこの時期で、それまでトランプや花札のメーカーだった任天堂が発売した「ファミコン」というゲーム機が、またたくまに子供たちを魅了した。1985年のソフト「スーパーマリオ・ブラザーズ」は大ヒット商品となった。

1980年代の日本は、デジタル化とともに、バブルと消費文化、またそれと相関関係にあるポストモダニズムによって特色づけられるであろう。重厚長大で真面目が尊ばれる工業社会的価値観に変わって、悪く言えば軽薄短小、よく言えば、軽やかでとらわれない生き方が“cool”とされるようになっていった。電話機のスロットに硬貨をボトボト入れるよりテレカの方が、改札口での職人技的な入鉄よりも自動改札機の方が、銀行で長時間待たされるよりもキャッシュカードでATMからさっと引き出す方が便利でスマートだと歓迎された。田中康夫『なんとなく、クリスタル』（1980）は、ファッションに浮遊するこれまでにない感覚を打ち出していた。アイドル歌手の松田聖子も、コケットリーを含んだ愛くるしい顔立ちとアニメ的なうぶさで、時代によくマッチしていた。（女生徒の間で流行した「丸文字」や、「ハローキティ」にも似た感触があった。原節子、吉永小百合、山口百恵とは違う、演出された「可愛さ」が売れ、若い男性もそれに調子を合わせて踊ったり、嬌声をあげるようになった。）一方で、「旧世代」の大人たちとともに、そうした風潮に乗り切れない若者たちも相当数残存しており、尾崎豊やBOØWYが彼らの代弁者としてカリスマ的人気を呼んだ。（「十五の夜」が1983年。）

「コンビニ」が全国に広がりを見せたのも1980年代だった。コンビニは日常感覚で入れ、入れれば（監視カメラを無視すれば）放っておいてもらえる無機質空間のようで、マクドナルドの空気と似通うものがあった。やがてこのコンビニは、宅配便の集荷、公共料金の支払い、チケット販売（90年代）、ATM設置（2000年代）と諸機能を集約し、街のシナプスのようになっていくのだが、それは、80年代から始まった社会のオンライン化の一連の進化の一部である。今や経営上のデファクトになっているPOSシステムが世界最初に導入されたのが、1982年のセブンイレブンにおいてであった。

性風俗面では、ビデオ・デッキの普及につれて、アダルト・ビデオ（AV）の普及が猛烈な勢いで進



んだ。最初の AV が制作されたのが1981年で、当初は男優と女優の間で実際の性行為は行われなかったが、しだいに「本番」が当たり前になっていく。ハード・コアの AV の台頭に、ロマンポルノは大刀打ちできずひっそり退場する。テレビでは、1983年の TV ドラマ『金曜日の妻たちへ』が人気となり、「不倫」という言葉が定着した。クリスマス・イブに、恋人たちが一緒にホテルに宿泊し愛を交わすという日本固有の風習が始まったのもバブル期からのことで、それは今日まで続いている。

1980年代初頭、70年代末に始まっていた「ノーパン喫茶」が最盛期を迎え、一部はファッションヘルスへ転化していく。吉行淳之介『夕暮れまで』（1978）にちなんで「夕暮れ族」と呼ばれるようになった中年男性を対象にした「愛人バンク」も話題を呼んだ。こうした性風俗の際限のない拡散に対し、1985年「新風俗営業法」が制定され、営業時間は午前0時まで、のぞき部屋、ファッション・マッサージなども届出対象とされた。この影響でノーパン喫茶が淘汰された。また1987年、異性間性的接触による女性エイズ患者が認定され、ソープランド（トルコ風呂の名称は、1984年に、トルコ人留学生の訴えによりソープランドに改称）を始めとする性産業に大きな打撃を及ぼすことになる。

ダンスではディスコ・ダンスが人気となり、バブル期の黄昏に開店したジュリアナ東京は、1990年代初頭にその最期の輝きを放った。アニメ界では、宮崎駿『となりのトトロ』（1988）が日本のアニメの成長ぶりを遺憾なく示した。しかしアニメは、そうした童心をくすぐる一方で、露骨な性愛表現によって色情を刺激するようになっていく。80年代の男性向けのコミック、また「レディースコミック」にそれが顕著に現れてきた。また1980年代前半から、大人同士の性愛だけではなく、「ロリコン」のようなオフ・ロードの性も表の舞台に登場するようになった。こうしたバブル景気に見合うような爛熟した性風俗が花開く1989年、64年続いた「激動の昭和」はその幕を閉じるのである。

## 2.6. 1990年代

1989年の、世界を震撼させたベルリンの壁崩壊、ルーマニア革命に引き続く、1990年の東西ドイツ統合と冷戦の終結、アメリカの一極支配を象徴するかのような1991年の「湾岸戦争」（これも軍事兵器的には代理戦争の趣があり、米軍のハイテク兵器が、イラク軍のソ連製兵器を圧倒する様が、メディアを通じて世界に配信された）、そしてまさかと思われたソ連邦解体で幕を開けた1990年代は、フランス・フクヤマが「歴史の終わり」（1992）とまで揚言したように、アメリカにとっては一人勝ちの経済好況を意味したが、日本は逆に不況に沈み、「失われた10年」として記憶されることになる。

1991年、1980年代後半からの「バブル」は崩壊した。デフレ不況が継続し、赤字国債の増発によって国の借金は累積し、企業もリストラによって人員削減を行い、失業者やホームレスの人々が目につくようになった。1997年には、北海道拓殖銀行の倒産に続き、四大証券の1つ山一証券が廃業、この年、自殺者数は年3万人を超え、以後今日まで13年間、3万人超えの状態が継続することになる。

1990年朝刊の1面全部を使った宮沢りえのヌード広告は、ソ連邦崩壊と同じほどに日本中を驚かせた。翌年出版された、篠山紀信撮影・樋口可南子写真集『water fruit』、篠山紀信撮影・宮沢りえ写真集『Santa Fe』は、警視庁が摘発を見送った最初の「ヘア・ヌード」写真集となり、高額であったに

もかかわらずミリオンセラーとなった。ヘア解禁については、アメリカでは1970年代初めには、ミュージカル *Oh! Calcutta!* で舞台の上でも解禁されていたのに、日本はこの点についてだけ奇妙なこだわりを示していた。以後今日まで、有名女優が次々と「ヘア・ヌード」写真集を出すこととなる。

ファッションでは、「茶髪」とコギャルファッション、そして風俗面では、1990年代前半（1996年にピーク）の「援交」、「ブルセラ」、「ギャルゲー」（ヴァーチャルな性愛ゲーム）の流行が世論を賑わせた。「援交」は、消費文化になじんでしまった女子高校生たちが、金銭を得るために自分の性を売ることだが、その気軽さが旧世代を啞然とさせた。しかしある社会学者たちは「援交」を弁護し、性を買う中年男性の方を非難した。フェミニズムも、上野千鶴子らの「論客」の登場により、男を弾劾・冷笑するような殺伐たる論調に変質していく。渡辺淳一『失楽園』（1997）、および同年公開の同タイトルの映画、TVドラマによって、再び不倫がクローズアップされた。石田純一の「不倫は文化」発言、財務省役人の「ノーパンしゃぶしゃぶ」接待事件などもこの時期のことである。

メディア領域では、PCで再生でき、複製製造のスピードに圧倒的に優れるデジタルのDVDが1996年に発売され、ビデオテープに取って代わるようになっていく。しかし何と言っても、Windows 95によって格段に操作性のよくなったパソコンが一般家庭に普及したこと、またインターネットが日本に本格上陸したことは文句なく画期的であった。この1995年という年は、オウム真理教による地下鉄サリン事件、阪神淡路大震災と併せて、日本人の記憶に、大きな歴史の転換点として刻まれている。インターネットは社会のあらゆる面に影響を与えつつあるが、それは性愛表現にとっては願ってもない habitat となり、アダルト情報はインターネットという培地でバクテリアのように増殖した。情報の提供者が売るのは搬送が面倒なモノではなく、一瞬で送れるデジタル情報だけなので手間がかからず、また顧客はプライバシーを守りながら情報を受けとることが可能となった。CATVもポルノ専門チャンネルが開設され、24時間ポルノ番組が流されている。ポルノ関連の犠牲者も増えていった。

## 2.7. 2000年代

2001年9月11日の「同時多発テロ」は、「歴史の終わり」どころではない、21世紀の前途多難を思わせた。アフガニスタン戦争、イラク戦争とあてどない戦争が継続され、同年発足した小泉内閣は、進んでアメリカに挺身協力した。また経済的にも対米追従の新自由主義的政策を推進し、貧富の格差はますます広がり、「ニート」「派遣社員」と呼ばれるワーキング・プアの大量発生を生んだ。資本主義に内在していた軍隊の冷酷さが露骨化し、人間のモノ化が進んだ。2008年の「リーマン・ショック」は、マネーゲーム経済の驚くべきからくりを垣間見させた。先進国は軒並み危機的不況に陥り、日本も出口の見えないデフレ不況と債務の増大によって、首相がくるくると交代するようになった。

一方、メディアの進歩はとどまることを知らないように続く。画期的だったのは、1999年に始まったiモードによって、携帯電話がネット接続できるようになったことで、これによって、携帯電話からの電子メールの発・受信、ネット情報へのアクセスが可能となった。アナログ世代にまでもこの「ケータイ」所持は広まり、電車の中で多くの乗客がケータイを見ている光景が日常化していく。2007年に

は、アップル・コンピュータ／ソフトバンクから、iPhone という CPU 内蔵の「スマート・フォン」が発売され、持ち歩ける超小型の通信機器兼コンピュータとして急速にシェアを伸ばした。またコンピュータやケータイを利用したブログ、ツイッター、フェイスブックという“social network”が普及してきたのもこの10年の著しい特徴である。2011年7月にはテレビの地上波もデジタル化された。

日本の性風俗産業は、2000年代半ばに絶頂期を迎えるや、なぜか突然退潮の兆しを見せ始める。『警察白書』によれば、性風俗産業総数は、1999年の14,628から急伸し2005年に42,583となったのをピークに、2006年には17,492と激減している。この変化の最大要因は、派遣型ファッションヘルスである。ソープランドは1200～1300店舗で安定しているものの、それ以外は減少が目立つ。特にストリップ劇場、アダルトショップ、ラブホテル等は軒並み減少しており、アダルト映像配信業もはっきり斜陽化の過程に入っている。経済不振の他に、人口圧力、AIDS 等性病への恐怖、性情報の過飽和状態などが原因として考えられる。とくに若者の性風俗離れは顕著で、2008年には、性に「がっつかない」、女性と性関係なしで同居可能な「草食系男子」の存在がクローズアップされた。結婚率も減ってきており、30歳台前半の男性の未婚率は50%近くに上っている。経済力の不足、拒絶され傷つくことの回避、離婚に対する不安といった要因の他に、あざとさと冷酷さに満ちた「世間」に出ていきたくないという「ピーターパン・シンドローム」も働いているように見える。

女性も結婚生活に夢を持ってなくなっている。妊娠、悪阻、出産、マタニティ・ブルー、授乳、おむつ替え、育児、病気、公園デビュー、洗濯、掃除、買い物、食事の仕度、姑との諍い、受験、就職難、介護、倦怠期、夫の浮気、不倫、DV、そして離婚—家庭生活は何と多くの潜在的苦悩と面倒に満ちていることだろう。情報化によって、味気ない人生は、先の先まで見通しが利くようになっている。一人暮らしなら、たとえ親のparasiteとしてではあっても、テレビとネットとCDとゲームとコンビニさえあれば、とりあえず餓死せず、それなりに生きていける。何を好んで修羅場に出ていくことがあろう。社会のメディア化は、人間関係の砂漠の中で性的 bloom を乾涸びさせた「オジサン」や「オバサン」という名の「大人」になることを回避させてくれそうに夢見させてくれるところがある。

インターネット上には、あいかわらずアダルト映像、アダルトゲーム、児童ポルノが溢れ、少女アニメ等には過激な性愛表現が溢れていて、若者たちは casual sex に走る傾向と、逆に性愛を敬遠する傾向に二極化しているように見える。アナログ世代にとっての性愛には、政治と同じように、イデオロギー的な生真面目さや重苦しさが伴っていたが、今や性愛は情報化され、相対化されていて、日常の気軽な遊びくらいの重さしかない場合もある。アニメ世代のキャラクターに対する「萌え」は、現実とヴァーチャルとの混交があるとよく言われるが、それはメディアとともに存在してきた現象で目新しいものとは言えないにしても、性愛に対する attachment と detachment が、幾分自嘲気味に表現されたその軽みには、「デジタル的」と呼びたくなるような、これまでにはない新しい感覚がある。

### 3. まとめ

以上、戦後日本の歴史を、性愛とメディアという視点を絡めながら概括してきた。まず第1に指摘すべきは、20世紀は戦争の世紀で、苛烈な戦争がわれわれの心に深い影を落とし、それが性愛にも反映したということである。生の本質であるエロスはタナトスに鋭敏に反応する。戦争で肯定された残虐さは、性愛を歪めたり、逆にその傷からの癒しを性愛に求めさせたりする。冷戦が長く続き、核戦争の脅威にさらされ続けた人類は、性を解放することでその怯えに対処したと考えることもできよう。これだけ性が露に流布した世紀はなかったということが一体どういうことを意味しているのかについて、われわれはもっと考慮を払ってもよさそうに思われる。

第2に、「自由」が重要な視点となる。戦後日本は占領軍の押しつけた自由を与えられた。特高警察に突然拉致されて殴り殺されないですむ自由はありがたかったが、自由勝手の負の面は、美の失せた現在の都市景観や人間関係によく現れている。また非力な個人は権力組織や企業組織の網の目からめ捕られた存在にすぎず、現実には自由などほとんどありはしない。同じことが、憲法と同時に与えられた性的自由についても言える。親の決めた厭わしい結婚に従わなくてもよいのはありがたかったが、性的自由は青少年の性的放縦や既婚者の adultery にも甘い社会を生み、メディアへの性愛の浸潤も野放図に行われた感がある。離婚はほぼ3組に1組の割合で生じており、2組に1組の英米社会に比べればまだまだという指摘もあろうが、実質的に破綻している家庭は1/3よりずっと多く、それが子供の放埒を再生産している。よく指摘されるように、西洋諸国やイスラム諸国と違って、性に対する宗教的な禁忌を持たず、つい最近まで夜這いの風習を残していたところすらある日本では、性的享楽を受け入れることにそれほどの抵抗を感じないですむところがあり、法的自由が与えられると、たちまちその放恣なところが顔を覗かせる。売春は禁止されたが、上述のように形を変えて現在まで生き延びており、歓楽街の電話ボックスには「人妻宅配」等のチラシが、人魚の鱗のようにびっしりと貼られ、ネットには「ソープ嬢」のプロフィールや「グレード」別料金が公開されている。

性風俗と連動している第三の変数は、資本主義の興隆とその行き詰まりである。経済的な自由主義である資本主義は、資本主義的な性風俗を生み出すのが理の当然で、サービス産業である「風俗」も、また性を伝えるメディアも、資本主義的論理に基づいて運営されるがゆえに、性ほとんど exploit される宿命となる。性は商品化され、モノ化され、金銭の前に額づく。しかし当たり前だが、人間は、商品やモノだけで幸福になれるわけではない。それは便利さと効率化を求めた社会が限りなく鬱陶しいのとよく似ている。2000年代に入ってどこか性風俗に陰りが見えてきたのは、不況ということもあろうが、資本主義自体が、エートスとしても庶民の鼻につき始めていることと無関係ではないはずだ。

第四に、メディアと性風俗の関係が重要である。占領期の日本人が利用できたメディアは、新聞、雑誌、書籍、ラジオ、レコード、映画くらいのものであったのが、2000年代には、それらに、テレビ、ビデオ、CD、DVD、パソコン、ケータイ(スマートフォン)というそれぞれ強力なメディアが付け加わっている。そこには、メディアの、1) 多様化、2) 映像化、3) 個人化、4) デジタル化という

動きがはっきりと見て取れる。1990年代に本格化したネット社会の出現は、人類史的視点から見ても大きな地殻変動に違いない。農業社会 → 工業社会 → 情報社会という「進化」の図式は、消化器官 → 筋肉組織 → 神経組織という生物学的な成長の図式によくなぞらえられる。単純化の憾みはあるものの、的外れなアナロジーとは言い切れない。農地に依存する王侯・貴族・聖職者を頭とする前近代社会と、産業革命によるブルジョワ階級主体の近代社会に対して、情報社会は、神経組織を発達させることで、性を神経化すると同時に、旧い社会の暗部を白日の下に曝し始めた。テレビ、ビデオ、CD、DVD、パソコン、ケータイという新しいメディアは、上に見てきたように、「性」を社会に蔓延させる原動力になってきたのだが、見方を変えれば、それらのメディアは、農耕社会や近代産業社会の、陰に籠った淫靡な欲望を映し出す鏡の役割をも果たしてきたということにもなる。

そして最後に女性の意識の変化を挙げなければならない。これまでの日本の性愛が、男性を中心に定義され、女性たちをうまく言いくめてきたことはフェミニズムの指摘通りであり、情報社会にあっては、そうした欺瞞はもう通用しない。けれどもあるフェミニストたちが行っているような、半ば売名行為的な、男に対する呪詛や嫌味や嘲弄で、新しい性意識にたどりつけるというものでもないだろう。新しい意識の創造を担うのは、やはりめいめいの新しいアダムとイヴであり、その花のほとんどが、欲にまみれた八方塞がりのこの濁世の真ん中から咲き出さず他はないとしても、性が人間と人間を深く繋ぐメディアである限り、新しい可能性は常に開かれているはずである。

性はまた、人間と自然とを繋ぐ地下水脈のようなメディアになってもいる。性から猥雑さは消えないし、猥雑さこそが土俗的なエネルギーの源でもあってみれば、残って然るべきであろう。山、川、海、空という自然も、通念とは裏腹に、猥雑さを底に秘めている。しかし自然は、猥雑さは許容しても、不浄を嫌う本性を持つ。腐臭を放つ魚の棲まないドブ川は、どう見ても自然の好きな姿ではない。性も、強姦や纏足や児童買春のような性は、ドブ川と選ぶところはない。性を搾取する資本主義的な心根は、自然をモノとしてしか見ない人間の傲慢とつるみ合っている。しかし性は、抑圧しすぎて息苦しさからの歪みを生むのは歴史の教訓であり、川の清澄も度を過ぎれば魚も棲めなくなる。性のバランスの喪失は、生態系の混乱同様、この世のメディア全体のバランスの喪失と関連してくる。なぜなら、二次的、三次的な所謂「メディア」は、上に見てきたように、性と血を通わせているからだ。vernacular なコミュニケーションを好む、われわれの人生と深いところと繋がっている、生きた柔らかな、始原的なメディアの1つ——それが性を見るべき、この時代の視点なのであろう。

{ 原稿提出 平成23年9月16日 }  
{ 修正原稿提出 平成23年11月25日 }

— 注 —

- (1) 『大岡昇平集』第1巻（岩波書店、1983）pp. 518-519.
- (2) <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%86%89%E3%81%84%E3%81%A9%E3%82%8C%E5%A4%A9%E4%BD%BF>
- (3) 広岡敬一『戦後性風俗大系 わが女神たち』（朝日出版社、2000）p. 147.
- (4) 亀井俊介『ピューリタンの末裔たち アメリカの文化と性』（研究社出版、1987）pp. 4-6.
- (5) 橋本与志夫『ヌードさん ストリップ黄金時代』（筑摩書房、1995）pp. 198-199.